

もっと知りたい

武者小路実篤

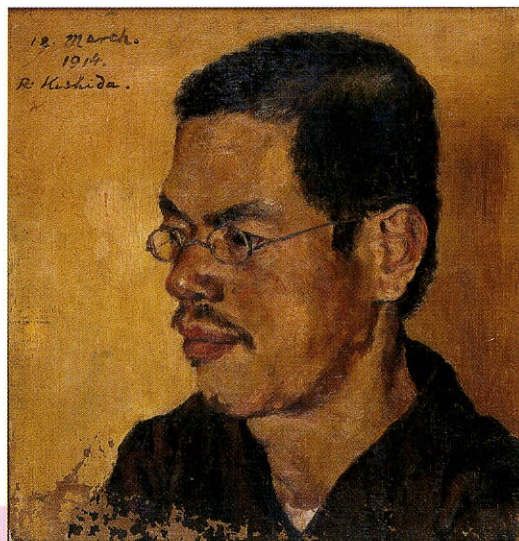
ともだち②

きしだりゅうせい

岸田劉生

岸田劉生は絵の勉強をしていた時に、武者小路実篤たちが発行した『白樺』を読んで大変感激しました。まもなく、実篤や白樺の仲間と親しくなりましたが、岸田はその出会いを「第二の誕生」と言うほど、人生を変えるような強い衝撃でした。

一方、実篤は岸田の画家として才能を見だし、いつも力づけ、自分の本の装幀やさし絵を頼みました。



◆岸田劉生「武者小路実篤像」大正3(1914)年

(東京都現代美術館蔵)

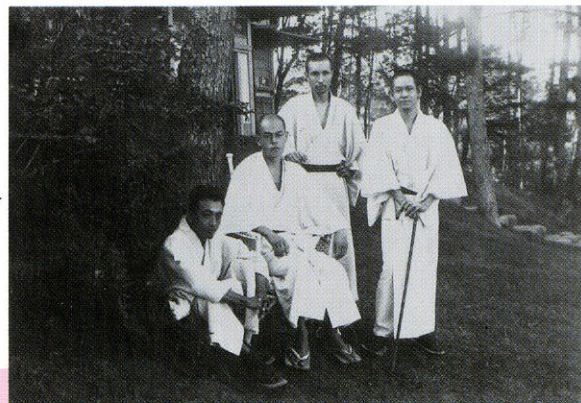
実篤29歳の時の肖像。この作品について実篤は「若い時の感じが実によくかけている。岸田で始めてかけるもののように思う」と書く。二人の友情の記念であり、岸田の代表作のひとつで実篤が愛蔵していた。(写真は実篤愛蔵時の状態)

「柳を通じて武者ともじき知り合になった。始めは画を見に行つたものだが、それより話をするのが何ともいえぬ楽しみだった。これまで、そういう友達を持つ機会のあまりなかった僕にとってこの事は本当に、第二の誕生とっていい位の力強い事だった」

(岸田劉生「思い出及今度の展覧会に際して」『白樺』大正8年4月号)

*……「柳」は、柳宗悦のこと。

*……「武者」は、武者小路実篤のこと。



◆鎌倉にて 大正7(1918)年8月
白樺の仲間。右から岸田劉生、長与善郎、武者小路実篤、園池公致。



◆「花咲翁」さし絵 大正6(1917)年

『白樺』大正6(1917)年6月号に発表。実篤が昔話をもとに小学生のために「花咲翁」を書き、岸田がさし絵を描き出版された。これは、岸田が実篤の作品にさし絵や装幀をした最初の仕事。

あなたは?

- 生き方や考え方を変える出会いはありますか?

こんな人

岸田劉生 (1891~1929年)

画家。写実を追求した細密な絵を多く描き、娘・麗子を描いた作品で有名。後半は伝統的な日本の美に興味を持ち、日本画の制作もした。

岸田は尊敬している実篤の本の装幀そうていができることを光榮に思い、また、実篤が出版する本の装幀をすべて自分が担当できればと願っていました。

岸田は画家として友だちのためにできることをし、また、この頃、遠く離れた宮崎県の新しき村で暮らし、いた実篤へ自分の思いを手紙で伝えていました。

岸田劉生より実篤あてはがき
大正9(1920)年1月14日
『友情』の装幀について。
「御ハガキうれしくみた。白樺の表紙につきあ、云つてもらつて本当にうれしく思つた。君の『友情』の装幀無論喜んです。君の出す本は皆僕にさせてもらへば光榮と思つてゐる位だ。発行所の人からも手紙もらつた。それによると金をかけてもいゝ由。木綿にソメモノにしてみやうかと思つてゐる。」



◆『友情』初版本 大正9(1920)年

岸田と実篤は、年を重ねてゆくと、興味が変わり、意見が違つてくるところもありました。それでも、お互いの考えを尊重し、二人の友情は少しも傷つきませんでした。



あなたは？

- 友だちのためにできる事を考えてみよう。
- 友だちと意見が違つた時は、どうする？



◆武者小路実篤「冬瓜と南瓜」 昭和41(1966)年
画に書かれた実篤の言葉は、岸田との友情を象徴しているようです。

「ロダンに就ての考も、岸田と僕とは随分ちがうらしい。自分は岸田の画論を尊敬しているものだ。その実感の深さには実に感心する。(略)しかし自分は岸田の画論を同感し、尊敬しつゝ、なおそれからはみ出る自分の精神に忠実になる。」
(武者小路実篤「六号雑誌」『白樺』大正9年11月号)